

〈連載〉

救急事例報告

— Case report 07 —

外国人を 搬送した4事例



留萌消防組合消防本部留萌消防署

島 有希 (しま・ゆうき)

北海道深川市出身 平成26年7月1日消防士拝命

平成26年4月28日救急救命士国家資格取得

趣味はサッカー・映画鑑賞 等

はじめに

北海道の北西部に位置し、日本海沿いにある留萌市の「黄金岬」は全国夕日百選にも選出されており、6月下旬から8月下旬と、真冬には、けあらし（海から立ち上げる蒸気が幻想的な風景）も見ることが出来る。また。月に一度、港で行われるるもい市には地元で愛される浜焼きやブタジン等があり、景色だけではなく、食も堪能出来る。



留萌市でけあらしが発生した様子

発生条件として、晴れている、気温が-15℃前後、海水温と気温の温度差が15℃以上ある時に発生しやすい



るもい市の浜焼きの様子

他にもホタテ釣り、グルメ屋台、鮮魚農産品の直売などがある。

はじめまして。今回は、平成26年に救急救命士の資格を取得し、救命士としても4年目とまだまだ駆出し（発展途上中!?)の留萌消防署に勤務する島 有希が、この4年間で経験した外国人の救急搬送4事例を紹介する。なお、写真は全て再現である。

〈留萌消防組合の概要〉は平成29年6月号P.104を参照ください。

〈事例〉

事例1

覚知時間12時28分、「宿舎で28歳中国人女性1名が眩暈を発症し倒れた」と日本人から119番通報。

現着時、宿舎は狭隘で、周りには大勢の中国人（同居人）が集まっていた（写真1）。活動スペースを確保するため日本語で説明するも、全員が日本語を理解できず、言葉では伝えることは困難であった。次にジェスチャーで説明しようとするも（写真2）全員が興奮状態ということもあり意思疎通が図れず、限られたスペースで活動を実施した。

傷病者接触時、傷病者は居室内ベッド上に仰臥位で眩暈を訴えていた。意識レベルはJCS1。日本語が話せる人が1人いて、その人から情報を詳しく聴取した。搬送時に同



写真1 宿舎は狭隘で、周りには大勢の中国人（同居人）が集まっていた



写真2 全員が日本語を理解できず、ジェスチャーで説明したが理解されなかった



写真3 同居人の何名かが搬送の手伝いをしようとしていたが、言葉が通じず搬送に時間がかかってしまった

居人の何名かが搬送の手伝いをしてくれようとしたが（写真3）、言葉が通じず、搬送に余計に時間がかかってしまった。

事例2

覚知時間22時28分、「20代ベトナム女性が急に意識がなくなり足が冷たいので救急車をお願いします」と日本人から119番通報。

現着時、傷病者を囲む様に外国人の友人7人が集まっており（写真4）活動障害と判断したため、日本語が話せる人を探し出し、活動スペースを確保することができた。傷病者接触時、JCS200で白目を剥き全身性の痙攣を起こしていた（写真5）。現場でバイタル等を測定しようとした際、興味を持った友人達が一齐に活動スペースへ入ってきたため、活動の支障を来すことを通訳を通じて友人たちに伝え、通常活動に戻った。搬送途上、痙攣は治まったが容態は変化なく病院収容となった。



写真4 傷病者を囲む様に外国人の友人7人が集まっていた



写真5 傷病者は全身性の痙攣を起こしていた

事例3

覚知時間2時13分、「全身蕁麻疹でかゆく、両手が腫れている」と傷病者本人から119番通報。

現着時、救急車の扉を開放したところ、傷病者はもの凄い勢いで同僚と共に車内へ駆け乗って来た（写真6）。救急隊が情報聴取しようとしたが答えることなく一方的に話しかけてくる状態（写真7）で、また、同僚も同じく興奮状態だった。日本語を理解できたので落ち着かせることを優先し、名前や生年月日等を聴取することができた。この



写真6 救急車の扉を開放したところ、もの凄い勢いで同僚と共に車内へ駆け乗って来た



写真7 救急隊の質問に答えることなく一方的に話しかけてくる

時点で韓国人であることが分かり、生年月日を聴取するも日本とは表現が違うため、保険証を提示してもらい年齢等が判明した。搬送途上、同僚ともに落ち着き、容態等変化なく病院収容となった。

事例4

覚知時間2時14分、「イカ釣り漁を行っていたインドネシア国籍の男性が、右目にイカ釣り針が刺さりました」と海上保安より119番通報。

現着時、イカ釣り船が岸に到着していなかったため、海上保安に状況説明を受けた(写真8)。現着から10分後、イカ釣り船より傷病者1名がイカ釣り針を右手にて保持し独歩にて救急隊へ接近してきた(写真9)。傷病者自



写真8 海上保安に状況説明を受ける



写真9 イカ釣り針を右手にて保持し独歩にて救急隊へ接近する

体は落ち着いていたが、日本語が話せないため、本人より詳しい情報は聴取することはできなかったため、簡単な英語を用いて名前と年齢の聴取だけを行い病院へ搬送した。

考察

留萌市には、約100人程の外国人が居住しているが、若年層が多く、全国814市区の外国人居住順位も774位と低いこともあり、留萌消防本部の管内の外国人救急搬送事例は非常に少ないのが現状である。当消防本部においては、外国人対応用に作っているものも、実施していることもないものの、外国人の救急事例は「ゼロ」ではない。

今回、私が経験した4つの事例で共通して感じたことは、「言葉でのコミュニケーションの難しさ」であった。言葉は人々のコミュニケーションを担い、一人ひとりの意識を支える大きな役割を持っている。特に緊急を要する救急現場では言葉でのコミュニケーションは必要不可欠とである。しかし、今回のように言葉で伝えることが困難な状況では「別の方法」を用いなければならないこともある。例えば、外国人用マニュアルを用いての説明、日本語が話せる人を探し出す、絵や図を用いる等色々な対処法が考えられる。他にもジェスチャーや録音機器、顔の表情、擬音を用いる等、役立つ物は沢山あるように思われる。

広く普及しているスマートフォンでは無料で翻訳ソフトが使えることから、スマートフォンを介し、会話に近い状態で接することも可能である。しかし翻訳ソフトにも欠点があることから、機械翻訳で出力された文章がどの程度正確で、原文に忠実な文章なのか、翻訳先の言語を知らなければ検証は不可能である。特殊な意味を持つ言い回し、例外的な言葉の使い方などが登場すると、相手に理解のできない文章になりがちである。

今後も外国人救急には必ず遭遇する。その中でも心肺停止やショック状態等、一刻を争う場面にも遭遇することもあろうと思う。その際に言葉が通じないとなると同意も取れず、先の処置へと進むことができない。そういった場面を回避するために日々の訓練で外国人のシミュレーションを取り入れ対処の幅を広げていきたい。